

( 総則 )

第 1 条

1. 本紀要への投稿論文の執筆は本要領に従う。論文以外の投稿原稿もこれに準じるものとする。

( 投稿論文等の言語及び字数 )

第 2 条

1. 投稿論文等は横書きとする。
2. 投稿論文等は Microsoft Word などのワープロソフトにより作成し、日本語による投稿論文は A4 判用紙に印字する。日本語および英語以外による投稿論文もこれに準じる。手書きの原稿の場合は編集委員会に事前に相談されたい。
3. 原稿は以下のとおり提出する。  
投稿論文正文 ( 名前、所属機関名、連絡先等の執筆者情報を記載する ) 1 部  
投稿論文コピー ( 名前、所属機関名、連絡先等の執筆者情報を記載しない ) 1 部  
投稿論文を収めた電子媒体
4. 論文の字数は原則として 25,000 字以内 ( 7,500words 程度 ) とする。図表に要するスペースもこれに含める。また、原則として研究ノートは 20,000 字以内 ( 6,000words 程度 )、展望は 20,000 字以内 ( 6,000words 程度 )、( 調査 ) 報告は 15,000 字以内 ( 4,500words ) とする。図表に要するスペースも字数に含める。

( 投稿論文等の体裁 )

第 3 条

1. 投稿論文等には通しページ番号を付ける。
2. 投稿論文等の第 1 ページには内容を正確に表す表題、執筆者名及び所属機関及び役職名、連絡先を書く。
3. 投稿論文等の第 2 ページには表題 ( 第 1 ページと同じもの )、18 行 ( 720 字、216words ) 程度の論文の要旨および 5 ~ 8 語程度のキーワードを記す。
4. 投稿論文等の第 3 ページ以降に本文、注、参考文献の順に記述する。図および表はその後一括して 1 つずつ別ページとして添付する。なお、本文中に図および表の挿入個所を明示して、必要な大きさを行数で示すものとする。
5. 日本語による投稿論文等は、最後のページに英文表題・執筆者名、18 行 ( 216words ) 程度の論文要旨および 5 ~ 8 語程度のキーワードを記す。また最初のページの脚注に執筆者の所属機関及び役職名、連絡先を記す。

## ( 投稿論文等の書き方 )

### 第 4 条

1. 投稿論文等の書き方は以下を原則とする。これと合致しない場合は、紀要編集委員会は修正を要求したり、修正を行うことができる。理系、医学・保健系の書き方については、各分野の慣行に従う。
2. 本文は章節項などで構成し“ ”，“2.3.”，“(4)(5)(6)”のような見出し番号とタイトルをつける。
3. 日本語による投稿論文は新仮名遣い、常用漢字を用い、平易な口語体で記す。漢字についての専門語はこの限りではない。副詞、接続詞、連体詞、助詞は原則として平仮名、同音多義で誤読のおそれのあるものは漢字、送り仮名は活用語尾を送る。数字の書き方は、原則としてアラビア数字を用いる。成語・慣用語・固有名詞・数量的意味のうすいものは漢数字とする。例えば、「一般的」、「一部分」、「第三者」などである。ただし「19世紀」、「第1四半期」等は例外とする。英語による投稿論文も自然で正確な表現を用い、できるだけネイティブスピーカー等の校正を受ける。
4. 約物の使い方
  - (1) 句点(。)と読点(、)は用いず、ピリオド(.)とコンマ(,)を用いる。
  - (2) 中グロ(・)はあまり使うと目立ちすぎるので、名詞並列の場合に使う。欧文略字には中グロを使わないで、ピリオドを用いる。

例) J. M. Keynes

しかし最近ではピリオドを入れないものも多くなった。この場合は一般的な慣例に従う。

例) EEC, IMF, OECD など
  - (3) 引用文は「」を用い、クォーテーションマーク、例えば“ ”などは、欧文引用のみに用いる。
  - (4) 二重カッコ『 』は書名や重引用符に用いる。
  - (5) 述語および固有名詞の原綴りを書く時は、パーレン( )でくくった中に欧文を書く。必要な場合はキックコー〔 〕やブラケット[ ]を用いてもよい。
  - (6) ダッシュは挿入句などの場合、2倍のものを使う。
  - (7) ハイフン またはダブル・ハイフン= はシラビケーションのほか、複合語や外国固有名詞などに使う。
  - (8) リーダー ... は中略の際に使う。
  - (9) 傍点は文字の上におき、「・」とすること。
5. 人名は原則として原語で表記する。ただし、広く知られているもの、また印字の困難なものについてはこの限りではない。
6. 数式は別行に記し、末尾に通し番号を付ける。文中で使用する場合には特殊な記号を用いず、“a/b” “exp(a/b)”などの記号を用いる。数式は執筆者による指定が大切であるから、複雑な場合は青色鉛筆で植字上の注意を書き入れる。数字や記号にはイタリックが多いから、必ず落ちないようにアンダーラインを朱記する。活字の格差は、大、中、小と指定する。上ツキ、下ツキはa, xのように指定する。C, P, S, T, Wなど大文字と小文

字の字形の同じものは、はっきりと区別する。ギリシャ文字（アルファ）、（ガンマ）、（オメガ）とアルファベットの a（エイ）、r（アール）、w（ダブリュ）を区別する。

7. 注は、通し番号を付け、本文中の該当箇所にその番号を記す。注番号の位置は右肩斜め上とし、1)、2)、3)、...とすること。そして注釈文を本文のあとにまとめて記すこととする。
8. 数字はアラビア数字で横書きし、三桁ごとにコンマ（、）をつける。
9. 図および表の書き方  
図および表（写真を含む）には“図 1、図 2”、“表 1、表 2”のように通し番号を付ける。

#### （参考文献）

##### 第 5 条

1. 文中で参照する文献および特に関連のある文献のみを、本文末に一括してリスト化することもできる。その場合は第 5 条の 2 と 3 の要領を参考にする。
2. 参考文献のリストの順序は、欧文和文は区別して、原則として執筆者のあるいは第一執筆者の姓によってアルファベット順にする。
3. 単行本の場合は、著者名、表題、発行所、発行年をこの順で記す。また、雑誌論文の場合は、著者名、表題、雑誌名、巻号、発行年をこの順に記す。表題、書名、および雑誌名等は略記しない。

以 上

2001 年 10 月 23 日 改正

2006 年 4 月 1 日 改正

2009 年 8 月 1 日 改正

2010 年 11 月 16 日 改正